慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	短い物語による倫理的場面の設定と判断に関する研究
Sub Title	A study on the construction of ethical situations and their judgment using short stories
Author	並木, 博(Namiki, Hiroshi) 内藤, 俊史(Naitow, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1975
Jtitle	哲學 No.63 (1975. 2) ,p.123- 140
JaLC DOI	
Abstract	In order to explore the process of ethical judgment, questionnaires have often been used by many researchers. Items of questionnaire, however, tend to be too general and abstract, and lack in concrete informations on which judgments are made. On the other hand, projective methods are also inappropriate to tap those processes that are rather conscious than unconscious. The purpose of the present study is to construct ethical situations by means of short stories and to obtain informations about the process of ethical judgments which could be done more easily in such concrete situations. Each short story has a ethical conflict in its setting, either between ethical norm, which is assumed to be internalized in every mind, and incompatible state of things, or between one ethical norm and another, both of which are present in the given situation. Subjects were asked to make judgment of the following two types on each short story. (A) Apart from you yourself, in other words, as a general rule. (B) Supposing you yourself are hero or heroin of the story. Through the following three experiments, number and type of situations used varies, but this procedure of judgment is common to all experiments. Experiment I questioned whether a ethical concept " appeal " existed, which was postulated by an author as a basic concept of his ethical theory. Some common dimensions of judgment were found among judges by using factor analysis and tentatively interpreted. Experiment II searched for the relationship between religious education and/or belief and ethical judgment. As a result, discrepancy scores between judgment A and B were larger for religious students than for non-religious students. Experiment III was designed to explore the properties of discrepancy score, its sex-difference, and the common ethical dimensions of short stories. Inspection of data suggested that two types of judgments and sex showed a significant interaction effect in several situations, and that factor patterns changed partly by the two types of judgments.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000063-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

短い物語による倫理的場面の設定と判断に関する研究

並　木　　博
内　藤　俊　史

序

昨今，我国に限らず世界的な動向として，道徳教育の重要性が改めて認識されているが，その実践にあたっては未解決の問題が山積している．しかし，それらの解決に直接寄与し得るような研究成果は決して多くはないのが現状であろう．一方，この領域についての関心も次第に高まり，関連する経験的な資料の数も増加している（沢田，他，1968）．本研究は，倫理的判断のメカニズムの解明のために，広義の実験的方法を提唱するものであり，これによってひろく倫理的行動に関する経験的知識の畜積に資することを企図している．本研究では，短い物語によって倫理的問題場面を設定し，そこに登場する主人公について，後述するように二種類の教示の下で判断を求めるのであるが，この方法は，道徳に関する従来の心理学的研究の多くが採って来た質問紙法や面接法に比べて，被験者をより積極的に，あるいはより人為的にそのような問題場面に直面させることから，広義の実験と呼びたい．

さて，道徳哲学や科学哲学の側から見て，倫理の問題に対するこのような実験的アプローチは，どのような位置づけが行なわれるのであろうか．例えばフランケナ（1967）は，道徳現象の記述または説明，あるいは倫理的問題と関係する人間本性の理論の樹立を目標とする経験科学も倫理学の

うちに含まれるとする．また Pap (1962) は，事実的命題から価値的命題はひき出し得ないことをまず指摘しながらも，この両者の体系づけとして規範的科学が成立し得ることを認めている．従って，極端な論理実証主義に見られるような価値と事実の明確な分離という方向を取らない限り，価値命題をも抱括した経験科学の存立が認められることになろう．本研究において，筆者はこのような経験科学の観点に立ちたいと思う．その場合，例えば，実践的三段論法の大前提に何故規範的命題が入らねばならないかは，さしあたり問題ではない．そのような価値命題を含めたままで，このような論理のパターンが一つの思考のモデルとしてどの程度観察事実に当てはまるか，あるいは諸条件の下でどのように変形するかを機能的に分析することこそが関心事たり得る．

本研究においては，物語場面の主人公の行為に関して，次の二種類の教示のもとで判断を求める．即ち，教示 A；自分を離れて，一般論と考えて，教示 B；あなた自身が物語の主人公であるとすれば，の二つである．ただし実際の手続としては，同一の場面に対して二つの判断を同時に，あるいは継続して行なわせることは避ける．教示Aは，いわばたてまえを述べさせるものであり，教示 B はいわば本音を聞き出すことをめざしている．このような判断を無理なく行なわせるためには，物語場面に倫理的問題としての切迫感を持たせるとともに，判断の手がかりとなる具体的な情報を含めておく必要がある．ひろく用いられる質問紙法は，その項目があまりに抽象的，一般的に過ぎること，また判断の手がかりになる具体的情報に欠けるところに問題がある．他方，倫理的判断は無意識の動機に規制を受けていると考えられるところから，投影法的手法も用いられている．しかし倫理的判断の大部分は，Piaget を引き合いに出すまでもなく，より認知的水準で行なわれるものであり，充分に意識的であり得る．以上の諸点より，物語場面を上述の教示の下で用いる方法がこの種の研究に適切である．

道徳の実証的，実験的研究には長い歴史があり，本研究のような短い物語を使用すること自体はとりたてて新しい手法ではなく，例えば Piaget (Flavell, 1963 ; Kay, 1968) が既に物語を用いており，また Swainson や McKnight (Kay, 1968) も類似の手法を採っている．従って，本研究の手法の新しさは二種類の教示 A，B の下で判断させるところにある．

次に，この領域における数多い研究の中で，方法的に，あるいは研究対象について，特に本研究に関連するものを二，三顧慮したい．まず J. F. Morris (1958 ; Kay, 1968) の研究は，本研究の関心事に非常に近いので，やや詳細に考察して見たい．彼は Piaget の道徳的他律性と自律性の区別の妥当性を認めた上で，Piaget の研究がほぼ 12 才以下に限られているので，これをさらに青年期まで延長することを試みた．ロンドン附近の中学生 300 名に対して，問題場面テストを用いて面接を行なっている．彼は Piaget から出発しながらやがて批判的になっているが，その理由は，抽象化はあくまで観察事実に基づいて行なわれるべきであるのに，Piaget にあっては，はるかに高次の分析カテゴリーを用いている点にある．比較的最近，Gagné (1968) が彼の累積的学習モデルの立場から全く同じ主旨で Piaget を批判していることも興味深い．しかし Morris は，道徳性における権威への依存性が発達の方向として次第に減少し，それに対応して，他律的規制から独立した道徳性が増えて来ると結論しており，この点では Piaget の説に同じである．ところが Piaget と違う点はまず "The discrepancies between value-judgments and expectations of what is virtually likely to be done" ということに非常な関心を持ったところにある．この discrepancies は，本研究で教示 A，B の下で二種類の判断を行なわせ，そのずれ，あるいは差得点を特に重視することと全く規を一にしている．ただし Morris の場合にはこれに着目するに止まり，具体的な方法を欠いている．さらに Morris は価値判断における個人間変動の大きさに着目している点でやはり Piaget とは違っている．標準的な問題場面に対し

ても，各人がそれに関連すると考えるような過去の状況における経験を持ち込むために反応の変動が生じると述べている．つまり価値判断における状況的な性質を重視しているのである．

次に，C. W. Morris (1949, 1956) は，その経験的価値論を実験的人間学 Experimental Humanistics と呼び，個々人の相異った価値体系を実験的に探ろうとした．彼は絵画に対する審美眼や人生観を問題とし，例えば後者の場合，思想史上の人生哲学から生き方に関する 13 種類の記述を選び出し，これに対する被験者の反応より，人生観と生物学的，社会学的，心理学的要因との相関関係を検討している．

その他，Spranger の価値の類型を実証的に裏付ける研究は古くから数多く行なわれており，例えば Allport-Vernon 尺度を用いた研究 (Duffy, 1940) や，さらに因子分析法による研究 (Lurie, 1937) 等が見られるが，いずれも質問紙法によっており，また類型の確認に終って，価値判断のメカニズムにまでは触れていない．また，von Wright と Niemelä (1966) は多次元尺度法を用いて道徳判断の基準を探り，Piaget の認知形式にほぼ相当するものを確認しており，手法としては興味深い．

実　　験 I (片柴，前沢，1966)

目的　倫理学上の基礎概念が心理学的にはどのような構造と内容を持っているかを実験的に検討する．村井実著「人間の権利」(1964) は“訴え”という概念をその倫理体系の基礎概念の一つとして措定しており，例えば，慣習や法律もそれに満足している人々にとって一種の訴えを持ち，一方慣習や法律のおきてに抗する訴えが人々の中からそれなりのふさわしい理由をともなって生じて来て，そのような訴えと，おきての訴えとの間に，ふさわしい理由をめぐって対立が生じるという．このような“訴え”は本来倫理学上の概念として使用されているが，これが心理学的意味を一切ぬきにして措定される訳ではない．“訴え”ないしはその訴えるものの

内容が，客観性を備えた共通の規準として，人々の心の中に無理なく存在しているものであれば，そのような概念を倫理学上の概念として措定することの適切性が，言語レベルの体系の中からではなく，人間の行動の水準の事実からも裏付けられることになろう．

実験はまず，“訴え„ が関連すると考えられるような倫理的な問題場面を多数構成し，これに対する被験者の判断を求め，それにもとづいて“訴え„ の概念構造を因子分析法によって探る．さらに，「人間の権利」を読むことが被験者の“訴え„ 概念に何らかの影響を及ぼすかどうかを検討する．

方法　①実験材料　短い物語によって倫理的な問題場面を160種類作成した．その構成にあたり以下の諸点に留意した．(1) いわば倫理的葛藤が，個々人に内面化されている筈の道徳的規範とそれとあい入れない事実関係との間に，あるいは現実とのかかわり合いのうちに複数の道徳的規範の間に生じるような設定とする．(2) 物語の主人公を明示し，主人公が倫理的な選択を決断するものとする．(3) 登場人物の行為に必然性があって不自然でないこと．(4) 物語は約 200 字で，不必要な形容詞，副詞等を使わず，筋書だけとし，物語場面が多義的にならないように配慮する．

〔例 1〕 芥川氏は息子の明男とロッククライミングをしていたところ，ちょっとしたはずみでハーケンが抜けてしまった．明男はザイルで宙づりになったまま気を失っていた．芥川氏は岩場にしがみつき，ザイルで結ばれた明男の体重を支えていたが，今やその力もつきようとしていた．芥川氏はザイルを切断して自分だけは一命をとりとめるか，息子の明男と運命を共にするかの決断にせまられた．結局，芥川氏はザイルを切断し，明男は死亡したが芥川氏は生残ることができた．

〔例 2〕 明治時代の事であった．隆吉の父は高利貸の借金の返済に困り，知らぬうちに倒産にまで追い込まれ自殺してしまった．高利貸の老人は借金の取り立てにやってきて，「自殺したからといって貸した金が返っ

てきたわけではないのだから返してくれるように.」と言った．この高利貸は，貧乏人にも高い利子でお金を貸し，彼らを苦しめていた．老人が死ねば多くの人々が救われると考えた隆吉は高利貸の老人を殺害した．

160 の物語場面を小冊子にまとめ，その他判断の記入用紙を判断Ⅰ，Ⅱにつき各一冊作成した．②被験者　最高 70 才の旧制大学出身の技術者，主婦，大学生，高校生等，いずれも倫理的問題にしっかりした見識を持っていると思われるもの 16 名．なおこの中には，著者村井実教授自身も含まれている．③実験手続　各判断者には物語場面の小冊子，判断記入用紙Ⅰ，Ⅱ及び「人間の権利」一冊を手渡し，判断の手続に関する教示を個別的に行なった．判断Ⅰは，160 場面についてまず教示 B，「主人公があなた自身なら」の下で判断を行なわせ，その後で教示 A，「一般的に」の下で判断させる．判断のカテゴリーは0，1，2の3段階であり，物語中の主人公の行為に訴えるものを非常に感じる時は 2，全く感じない時は0である．判断Ⅰを終えてから「人間の権利」を読ませる．読了後に判断Ⅱを判断Ⅰと同じ手続で行なわせる．各判断者がすべての手続を一ケ月のうちに終了するように求めた．

結果及び考察　3つの判断カテゴリーを適当に2分して，判断者間の四分相関係数を計算して，判断者間の相互相関行列（16×16）を求め，これに対して主因子法による因子抽出を行なった．計算処理は全て判断ⅠA，ⅠB，ⅡA，ⅡBにつき別個に行なった．その結果，4つの場合いずれにおいても第Ⅰ因子の固有値は非常に大きく，第Ⅱ，第Ⅲと急速に減少し，それ以下はほぼ横ばいとなるので，第Ⅲ因子までを問題にすることとした．この固有値の大きな第Ⅰ因子は，“訴え„ についての大きな共通因子が判断者の間に存在することを量的に示している．このような Q テクニックの因子分析の場合，因子の解釈の成否は各判断者の特徴づけが可能かどうかにかかっている．因子の解釈のために，いくつかの方法を試みたが，以下の処理方法が有効であった．主人公の行為が，全ての物語場面におい

て，個人的価値観，社会規範，現実の状況判断の三つの方向のいずれかに決定していることが明らかになったので，この三つの方向の相互の対立関係のパターンによって全ての物語を分類することを試み，最終的には六種類のパターンに分類することができた．次に，この六つのパターンの各々について判断者ごとに平均判断得点を計算し，それを大きさの順に順位づけた．例えば，現実の状況判断が何よりも優先するような行為が“訴える„判断者にとっては，このようなパターンが六つのパターンのうちで第一位を占める．このようにして各判断者を特徴づけ，これと判断ＩＢの第Ｉ因子とを関連させて因子の解釈を試みた．なお第Ｉ因子のパターンは四種類の因子分析においてほぼ等しいので，判断ＩＢのみによっている．その結果，第Ｉ因子，つまり主因子は現実の状況判断を重んじ，自己を主張し，また社会規範と相対立する傾向を意味するものと解釈できた．つまり，判断者共通の主たる“訴え„の概念内容がこれである．第II因子以下については明確な解釈は不可能であった．次に，四種類の判断につき得られる四種類の因子パターンの比較については，Ａ，Ｂ間には幾分の差異があるが，Ｉ，II間には殆んど差はなく，また第Ｉ因子の固有値もＩ，II間に大差が認められない．一方，判断Ｉ，II間の変動の有無について，判断者ごとにマクネマーの有意変化の検定を行なったが，16 名中２名についてのみ有意であった．従って，主因子の固有値が判断IIにおいて特に大きくならない事実とともに，原著書の読書によって，判断者の“訴え„概念がそろって来る傾向は全く認められない．

実　　験　II（小林，小栗，1968）

目的　宗教教育及び信仰の有無と倫理的判断との関係を短い物語場面についてＡ，Ｂ二種類の教示の下で判断させる事によって検討する．宗教と道徳の関連性についての従来の研究としては，例えば Piaget の道徳発達の理論に基づく Whiteman (1964) の研究があり，これによれば，教会や日

曜学校は7才～12才までの子供の道徳発達に対して一貫した影響を与えていないという．しかし Dukes (1955) の展望によると，メノ派の子供はそれ以外の子供に比べて，出来事を宗教に関係づけて受け取り，権威の源として宗教的なものを考える傾向が強いという．また Hilliard (1959) は，宗教及び宗教教育に対する態度について研究し，神が善に報い悪を懲ずるというような考え方や．それに基づく教育に対して，多くの青年が不満を示したが，宗教及び宗教教育が道徳観念と行為の規準の発達ないしは維持を助長するものとして受け取っていると報告している．本研究は，物語場面に対する二種類の判断を求めることによって，いわばたてまえと本音に対して宗教が及ぼし得る微妙な影響を探ろうとするものであり，従来の諸研究の調査方法では知り得ないような発見が期待される．

方法　①実験材料　30の短い物語場面を用いるが，倫理的問題の中でも特に宗教に関連の深いものを含めた．教示は A，B の二種類であり，5 段階尺度上で物語の主人公の行為に対する賛成の程度について判断を求めた．②被験者　カトリック系大学及び特に宗教色のない大学の男女学生．男性 4 名，女性 38 名，合計 42 名．③実験手続　物語場面の小冊子を用いて集団で実験を行ったが，時間制限はもうけなかった．

結果及び考察　宗教教育を受けた経験の有無と信仰の有無に関する質問項目の回答により，全被験者を次の 4 群に分類した．(1) ER 群；宗教教育を受け，また信仰を持つ者（11 名）．(2) $E\bar{R}$ 群；宗教教育を受けたことがあるが，信仰を持たない者（5 名）．(3) $\bar{E}R$ 群；宗教教育を受けたことはないが，信仰を持つ者（6 名）．(4) $\bar{E}\bar{R}$ 群；宗教教育を受けたこともなく，また信仰もない者（20 名）．

判断の得点は，尺度上で賛成としたものに 5，反対としたものに 1 を与えた．教示A，Bの下での判断の差の絶対値の平均を 4 群について比較すると，ER (.73)＞$\bar{E}R$ (.57)＞$\bar{E}\bar{R}$ (.52)＞$E\bar{R}$ (.43) の順序となった．宗教教育を受け，しかも信仰を持つ群において，たてまえ（教示A）と本音（教

示B）のずれが一番大きく，また宗教教育を受けながら信仰のない群でこのずれが一番小さいことは極めて興味深い結果である．宗教心が規範を意識化させるためにこのような大きなずれをもたらすとも解釈できよう．次に，宗教教育の有無で全被験者を二分した場合，E (.64), $\bar{E}$ (.53) であり，信仰の有無で二分した場合，R (.67), $\bar{R}$ (.50) という結果になった．また，極端な判断（尺度値1及び5）の選択の相対度数を四群について順位づけると，教示Aの下で $E\bar{R}$ (.54)>ER (.50)>$\bar{E}R$ (.48)>$\bar{E}\bar{R}$ (.42) となり，また同じく二分すると R (.50), $\bar{R}$ (.44), さらに E (.51), $\bar{E}$ (.44) となった．教示Bにおいても同様の傾向が見られた．従って宗教意識が判断の極端化を促す傾向があるといえる．

次に物語場面ごとに各群の判断の平均値の有意差検定を行なった．まず ER 群と $\bar{E}\bar{R}$ 群の比較については，例えば，宗教は特定の教会に参加する事ではなく，自分自身の心の中の声，自分自身の信じられる道であるとする場面では，$\bar{E}\bar{R}$ 群が ER 群よりも有意に ($P<.05$) 得点が高い，つまりそのような考え方に賛成している．また，生活苦のために妊娠中絶をするという場面では，$\bar{E}\bar{R}$ 群が ER 群よりもやはり有意に得点が高い ($P<.05$)．また冬山の遭難で，救助にむかって二重遭難に逢ったパーティに対し，新聞記者が友情の問題としてではなく，無謀な行動として書くという場面でも同じ傾向が有意に見られた．また，これら三つの問題場面では，教示A，Bのいずれの判断においても同じ方向に有意差が生じている．

これらの結果は，標本数も少いので決定的な結論を下す訳にはゆかぬとしても，宗教教育及び信仰の有無と倫理的判断の関連性は次のような傾向の中に現れているといえよう．即ち，宗教に無関係な群は，物語場面の状況に応じて柔軟な判断を示すが，これに較べて特に宗教教育を受け，また信仰もある群は，宗教的な教義に合致した行為は積極的に容認するが，判断における二重性，極端化あるいは絞切型化の傾向を示している．

実　　験 III（内藤，1973）

目的　倫理的問題を主題とする短い物語に対してA，B二種類の教示の下で判断を求めることによって，以下の諸項につき検討する．1）A，B二種類の教示の下における判断の差異．2）教示A，Bの下における判断の性差．3）教示A，Bにおける判断の差異の性差，及び差得点と性別との交互作用．4）因子分析法によって，物語場面の構造を探索的に調べる．つまり，教示A，Bにおける各々の判断の規準となっているような潜在的な次元を求めることを試みる．5）1ケ月の期間をおいて，同一の被験者に対して同一の物語場面について判断を求め，この種の判断の安定性を吟味する．

方法　①実験材料　短い物語による 20 の倫理的問題場面を用いるが，その大部分は実験 I，II で用いたものをさらに検討し（神戸，1971），修正した物語場面である．さらに，新たに加えた主題について構成したものも含まれている．被験者の行なう判断は，実験 I，II と同様，A，Bの二種類であり，各々の物語の主人公が示す行為に対して，賛成，反対の程度を5段階尺度上に記すように求める．判断の仕方についての教示，20の物語場面，及び判断の尺度等をすべて含む小冊子を作成した．②被験者　大学生 78 名，その他 33 名，合計 111 名．性別では，男性 49 名，女性 62 名である．③実験手続　小冊子を 185 名に配布し，一ケ月後に 111 名分を回収することができた．このほか，判断の安定性を調べるために，被験者 11 名を用いてほぼ一ケ月後に同じ手続により判断を行なわせた．

結果及び考察　各物語場面の判断の尺度値については，全く反対とした時に1，全く賛成とした時に5の得点を与えた．教示A，Bにおける各物語に対する判断の得点の平均値は，1.31～4.41，標準偏差は 0.79～1.52 にわたっている．

1）教示A，Bの下で行なう判断の間の差に関しては，まず被験者ごと

に教示Aにおける得点と教示Bにおける得点との差を求めた．この差得点の分布をみると，差得点が0となる頻度は比較的高く，これを中心に分布は正負両側にまたがっている．従って，二つの判断の差異は一定の方向を取らず，物語場面と個人についてその方向に変動がある．

A，B二つの判断の差について，平均値の有意性の検定を行なったが，20場面のうちの10場面において有意差（P<.01）が認められた．しかし，この10の物語場面を統一的に特徴づけることは困難であった．

次に，このような差得点の持つ意味を探るために各物語場面における差得点にもとづいて，物語場面間の相関行列（20×20）を求め，これに対して主因子法による因子分析を施した．その結果，全分散のうち共通因子で説明される比率は，第Ⅰ因子で11.0%，第Ⅱ因子までで16.8%にすぎない．また，差得点の絶対値にもとづいて同様の分析を試みたが，第Ⅰ因子で17.2%，第Ⅱ因子までで22.1%であった．また各因子の解釈も困難であり，従って教示A，Bにおける判断の差異の意味を共通因子を手がかりに見出すことはできなかった．

2) 判断の性差については，教示Aの下で3つの物語場面，教示Bの下で同じく3つの物語場面で有意差（P<.05）が認められた．そのうちの一つでは，教示A，Bのいずれにおいても有意な性差が認められた．その内容は，大学野球の花形選手である主人公が，両親の借金の返済の問題をかかえて，契約金の一番高いA球団を選ぶか，あるいは自分をそこまで育ててくれた恩人が所属しているB球団を選ぶかの選択をせまられる場面である．この場合，教示A，Bいずれにおいても男性が高い得点を示し，これは男性の経済的価値重視の傾向であり，有意な性差のあるその他二つの場面で同様の傾向が見られた．この結果は，Dukes (1955) が，Allport-Vernon 尺度を用いたアメリカの諸研究を展望して得た結論と一致している．またこれは，山下（1973）によって展望された日本での諸研究，及び総理府により行なわれた世界意識調査（1973）の結果とも一致している．

3) まず教示A，Bにおける判断の差を男女別に集計し，差の有意性の検定を行なった．その結果，男性群では 5 つの物語場面，女性群では 11 の物語場面で有意な差異が見られた．従って，教示A，Bにおける判断の差異が女性群に生じやすいと考えられる．この結果は，男女の性別と，教示 A，B における判断の差との間の交互作用を予想させる．そこで教示A，Bにおける判断の差得点の平均値を男女 2 群の間で比較した．その結果，二つの物語場面でその差が有意であり，教示と性別との交互作用を示しているものと考えられる．このような交互作用の顕著な物語場面の一つは，例として既に挙げた父子の遭難場面である．男性では「自分が主人公であったら」(教示 B)，自分の生命を守る方向へと「一般論」(教示 A) から変化し，女性では「自分が主人公であったら」(教示B)，父親一人だけが助かるよりも親子の絆を重視する方向へと変化している．この交互作用を差得点によらずに，各々の判断の得点によって表わすとすれば，教示Aの平均値は男性群 2.69，女性群 2.85，教示 Bの平均値は男性群 2.98，女性群2,47 と逆転して，いわゆる disordinal interaction を示している．同様に有意な交互作用は同じく例に挙げた高利貸殺害の物語場面において見られ，男性群が一般論としてはこのような殺人行為により好意的であるが，教示Bでは逆転している．このような交互作用は，道徳的判断における二種類の教示が，男性と女性に異った効果をもたらすことを示しており，男女差に関する興味深い発見である．

4) まず教示 A，B での判断それぞれにつき，物語場面間の相関行列 (20×20) を求めたが，相関は全般に低い (r＝－.32～＋.39)．この二つの相関行列について，主因子法による因子抽出を行なった．全分散に対する共通因子分散の占める割合は，第Ⅲ因子までは，教示 A の時 19.5%，教示Bで 20.0% にとどまり，独自成分として考慮しなければならない部分を多く残している．しかし上述の差得点の場合と異なって，各物語場面の性質と因子負荷量とを手がかりに，各因子の解釈は比較的容易であった．

第Ⅰ因子は，教示A，Bにおいてほぼ同じ負荷量のパターンを示しており，いずれも生殺与奪の因子と解釈され，殺人を許容することが負荷量の正の方向に一致している．なお，教示A，Bの各々の第Ⅰ因子間の順位相関は，$\rho=.65$ であり，二つの因子の意味が類似していることを示す．第Ⅱ因子は，個人生活の与奪の因子と解釈される．教示Aについては，個人よりも全体の重視が因子負荷量の正の方向に，また逆に個人の擁護が負の方向に一致する．例えば，プライバシーや，個人の生命と社会の秩序に関する物語場面に大きな負荷量が見られた．一方教示Bの場合には，因子負荷量の正負がほぼ逆転している．教示A，Bの二つの第Ⅱ因子の間の順位相関は，$\rho=-.70$ となり，二つの因子がほぼ同じ意味を持ちながらも方向が逆転していることを示しており，教示A，Bのもたらす効果の一つとして興味深い．第Ⅲ因子については教示，A，Bの間に対応は見られず，従って，二つの教示のもとでの判断の特徴を示唆する因子と推測される．教示Aにおいては，運命を共にするというような場面で負荷量が高く，精神的絆に関する因子と解される．一方，教示Bにおける第Ⅲ因子は解釈が困難であった．

5)　この種の判断の安定性を知る一つの指標として，一ケ月後のいわゆる再検査信頼性係数を計算した．被験者11名につき，20場面の繰りかえしがあるので合計220の得点対にもとづく相関係数を教示A，B別に求めた．その結果，教示Aの場合は，$r=.75$，教示Bでは，$r=.59$ であり，より一般的な判断の方が，物語場面により直接的に依存している判断に比べて安定性が高いことを示している．

討　　論

以上の実験結果のうち，教示A，Bの差得点に関する観察事実が特に興味深いが，その解釈や理論化のためには，さらにデータの集積が必要である．また因子分析の結果に関しては，まず実験Ⅰにおいて，”訴え„概念としての共通因子の存在が量的には確められた．しかしその解釈にあたっ

ては，因子分析法をこの種の問題に探索的に適用する時の通弊である曖昧さが依然残る．心理検査や知覚実験の場合には，あらかじめ共通次元の存在がある程度予想し得て，因子の解釈も比較的容易であることが多いのであるが，本研究のような場合には方法上の限界があるように思われる．また同様のことは実験Ⅲにおける因子分析にもいえることである．

本研究の物語場面の方法は，この他，一貫教育で育った学生とそうでない学生の比較にも適用を試みたが（堀井，他，1972），従来の調査方法では得られないような差異を見出すことが出来た．この結果は，本研究の方法の有効性を裏付ける証左の一つである．

なお，本研究はこれまで，道徳の発達的研究には触れていないが，物語場面を工夫することによって，かなりの年少者に対しても適用可能となる筈である．Kohlberg (1970, 1971) は，Piaget の発達的認識論の延長線上で道徳の発達的研究を行ない注目されているが，本研究の方法をそのような研究に関連づけることも今後の課題の一つである．

〔付記；本研究の基本的な構想については，村井実教授に種々御教示を仰ぎ，さらに実験Ⅰでは，被験者の一人として実験に参加して頂いた．あらためて謝意を表したい．引用文献欄に挙げたように，実験Ⅰは片柴和子，前沢とも子の両氏，実験Ⅱは小林洋子，小栗伊津子の両氏によって，また実験Ⅲは内藤によって，いずれも卒業論文実験として行なわれた．また物語場面の再吟味については，神戸敬子氏の研究に負う所大である．なお本研究の梗概は，第 40 回日本応用心理学会大会で口頭発表を行なった．〕

引　用　文　献

Duffy, E. (1940) A critical review of investigations employing the Allport-Vernon Study of Values and other tests of evaluative attitude. *Psyhcol. Bull.*, **37**, 597-612.

Dukes, W. F. (1955) 吉田正昭訳，価値の心理学的研究．心理学リーディングス、

誠信書房，243-272.

Flavell, J. H. (1963) *The developmental psychology of Jean Piaget*. New Jersey: D. Van Nostrand, 290-297.

フランケナ，W. K.，杖下隆英訳 (1967) 倫理学，培風館，6-9.

Gagné, R. M. (1968) Contributions of learning to human development. *Psychol. Rev.*, **58**, No. 3, 177-191.

Hilliard, F. H. (1959) The influence of religious education upon the development of children's moral ideas. *Brit. J. educ. Psychol.*, **29**, 50-59.

堀井明子，星野淑子，加藤明子，植村真実 (1972) 一貫教育——公立出身者，幼稚者出身者の比較，慶応義塾大学文学部卒業論文.

神戸敬子 (1971) 倫理的な場面における判断の研究——方法論的吟味. 慶応義塾大学文学部卒業論文.

片柴和子，前沢とも子 (1966) 倫理的場面の pattern と判断に関する基礎研究——実験倫理学の試み——. 慶応義塾大学文学部卒業論文.

Kay, W. (1968) *Moral development*. London: Georg Allen and Unwin Ltd.

小林洋子，小栗伊津子 (1968) 宗教教育及び宗教心の倫理的考察. 慶応義塾大学文学部卒業論文.

Kohlberg, L. (1970) Stages of moral development as a basis for moral education. In Beck, C. and Sullivan, E. ed., *Moral education*. Toronto: Univ. of Toronto Press.

Kohlberg, L. (1971) From is to ought. In Mischel, T. ed., *Cognitive development and epistemology*, N. Y.: Academic Press, 151-235.

Lurie, W. A. (1937) A study of Spranger's value-types by the method of factor analysis. *J. soci. Psycol.*, **8**, 17-37.

Morris, C. W. (1949) 実験的人間学. 思想と科学，4巻，先駆社，1-8.

Morris, C. W. (1956) *Varieties of human value*. Chicago: The Univ. of Chicago Press.

Morris, J. F. (1958) The development of adolescent value-judgment. *Brit. J. educ. Psychol.*, **28**, 1-14.

村井実 (1964) 人間の権利. 講談社.

内藤俊史 (1973) 倫理的判断の因子分析的研究——実験倫理学の試み. 慶応義塾大学文学部卒業論文.

Pap, Arthur (1962) *An introduction to the philosophy of science*. N. Y.: The Free Press of Glencoe, 411-412.

沢田慶輔，大西文行，橋口英俊（1968） 道徳性の心理学的研究の動向．教育心理学年報，第7集，77-98.

総理府青少年対策本部編（1973） 世界の青年・日本の青年——世界青年意識調査報告書.

von Wright, J. M. and Niemelä, P. (1966) On the ontogenetic development of moral criteria. *Scand. J. Psychol.*, **7**, 65-75.

Whiteman, P. H. and Kosier, K. P. (1964) Development of children's moralistic judgments: age, sex, IQ, and certain personal-experimental variables. *Child Develop.*, **35**, 843-850.

山下栄一（1973） 価値観の形成．現代青年心理学講座4，金子書房，166-172.

A study on the construction of ethical situations and their judgment using short stories.

Hiroshi Namiki
Takashi Naitow

Summary

In order to explore the process of ethical judgment, questionnaires have often been used by many researchers. Items of questionnaire, however, tend to be too general and abstract, and lack in concrete informations on which judgments are made. On the other hand, projective methods are also inappropriate to tap those processes that are rather conscious than unconscious.

The purpose of the present study is to construct ethical situations by means of short stories and to obtain informations about the process of ethical judgments which could be done more easily in such concrete situations. Each short story has a ethical conflict in its setting, either between ethical norm, which is assumed to be internalized in every mind, and incompatible state of things, or between one ethical norm and another, both of which are present in the given situation.

Subjects were asked to make judgment of the following two types on each short story. (A) Apart from you yourself, in other words, as a general rule. (B) Supposing you yourself are hero or heroin of the story. Through the following three experiments, number and type of situations used varies, but this procedure of judgment is common to all experiments. Experiment I questioned whether a ethical concept "appeal" existed, which was postulated by an author as a basic concept of his ethical theory. Some common dimensions of judgment were found among judges by using factor analysis and tentatively interpreted. Experiment II searched for the

relationship between religious education and/or belief and ethical judgment. As a result, discrepancy scores between judgment A and B were larger for religious students than for non-religious students. Experiment III was designed to explore the properties of discrepancy score, its sex-difference, and the common ethical dimensions of short stories. Inspection of data suggested that two types of judgments and sex showed a significant interaction effect in several situations, and that factor patterns changed partly by the two types of judgments.